

助詞について

0. はじめに

- ・文法とは：言葉の使い方、文の作り方に関する規則。

文法の役割：およそ言語の記述は、具体的には2つの形で示される。1つは辞書で、これは1つの言語を構成する個々の語についての記述であって、それぞれの語の個性を描き出すもの。もう1つはその言語の語の共通する特徴を記す。言語の形式には、共通の契機をもつ語に共通の形または機能を付与する一般的な傾向があって、それによって語を群別する。その共通性が文法的現象であって、文法は、そのような現象を記述するのである。

(言語学大事典)

- ・文とは（寺村(1982)等）：

- 音の連続である。文の前後には必ず音の切れ目がある。文の終わりには特殊の音調が加わる。
- 「まとまった意味」「完結性」「意味的統一をもっていること」「話し手の判断、情意の表現」

	I	II
意味	完結している	まとまっている
かたち	用言の言い切りの形でおわる。 または、その後に終助詞がつく	用言が述語として使われるときに 必要な補語が含まれている

1) 言う → (動作・行為を概念として表したものにすぎない)

2) 言うことはやさしい。 → (")

3) 君はこう言うか？

－言う

→日本語では、文の前後の文や状況によって聞き手がそれと分かるのであれば、述語以外のどの要素も言わずにすませることができる。

→かたちの条件IIはみたされていないなくても、文脈、状況から聞き手にそれと分かる場合は、意味の条件IIをみたしているとして「文」と認める。

4) say

5) To say is easy. (to 付きの不定詞)

6) Do you say so?

－Yes, I say so. (Yes, I do.)

- ・(単)語とは－あるまとまった意味をもつ音声の流れを構成している(聞き手が即座に認知できる)「部分」が、もうそれ自身の中により小さい部分を含んでいないとき、それを「単語」と呼ぶ。(国立国語研究所(1978))

(単) 語の認定について

- 複合語 (高エネルギー研究所、勉強机、一気飲み)
- 派生語 (おばあさん、寒さ)
- 助詞の場合
- 活用する語尾をどう考えるか。

1. 助詞

→ 単独では、用いられず、主として自立語に付いて、補助的な意味を付け加えたり、その自立語と他の自立語との関係を示したりする語。

・格とは:

→ 名詞、代名詞などに表れる、あるいは、付けられる形の一種であって、名詞、代名詞などの語句と文中の他の語句との関係を表すもの。

・格の表現の仕方

→ 語尾の変化

→ 倒置詞との組み合わせ (前置詞、後置詞との組み合わせ)

cf) 主格、属格、与格、対格、奪格、能格

・「能格」について

花子 が 太郎 を 殺した。

主格 対格

他動詞主語 他動詞目的語

花子 が 走った。

主格

自動詞主語

花子 が 太郎 φ 殺した。

能格 絶対格

他動詞主語 他動詞目的語

花子 φ 走った。

絶対格

自動詞主語

・「表層格」「深層格」

→ 「～が」「～を」「～で」などの格助詞で表される「形態的なカテゴリーとしての格 (表層格)」と、「動作主」「対象」「起点」「道具」「場所」のような「意味としての格 (深層格)」

花子が太郎を殴った。

太郎が花子を殴った。

花瓶が割れた。
太郎が花瓶を割った。

→殴る 「が<動作主>、を<対象>」
割れる 「が<対象>」
割る 「が<動作主>、を<対象>」

・「補(足)語」について

→述語が事態を描くのに必要な要素をその述語の補語と言う。
文が成立するための最低限必要な補語をその述語の必須補語(必須成分、項)。
文が成立するのに最低限必要であるとは言えない補語を副次補語。
昨日、公園で太郎が男の子を殴っていたよ。
cf) 彼女はふるさとの山の絵をととても美しく描いた。
私は彼女のしぐさをとても美しく感じた。

・格助詞：

→主に体言に付いて、主として述語とその体言との関連を表す。名詞の後ろについてその名詞と述語の関係を表す。

・格助詞の種類：が、を、に、と、で、へ、から、まで、より、ゼロ
→昨日、太郎と会った。(ゼロ格)
cf) 太郎はさっきご飯を食ったよ。(省略)

「が」の類別：「私が行きます」格助詞
「夏は涼しいが、冬は暖かい」接続助詞
「夏は涼しい。が、冬は暖かい」接続詞
「の」の類別：「それは私の本です。風の吹く晩だった。」格助詞
「それは私のです」準体助詞
「もっと大きいのはありませんか」形式名詞
「行くのいかないのと大騒ぎする」並列助詞

・取り立て助詞(副助詞、係助詞)：は、も、だけ、しか、ばかり

→文のいろいろな要素の後について、部分を特に際立たせる働きをするもの。取りあげられた要素を際立たせて、それ以外の別の要素との関係づけを表す。

→取り立て詞は格助詞のように、文の骨格を作るのに直接かかわることはない。

田中さんが見舞いに来てくれた。
田中さんも見舞いに来てくれた。
田中さんしか見舞いにきてくれなかった。

京都にも行った。
あの子はコーヒーさえ飲む。コーヒーくらい飲む。

cf) 「は」は取り立て詞：では、からは、には（がは×、をは×）
この本はどこで買いました？（「を」格）

・並列助詞(連帯助詞)：名詞の後ろについてその名詞と他の名詞との関係を表すもの
(と、や、か、だの)

・終助詞：文の最後か文節の切れ目に来て、話し手の気持ちや聞き手に対する働きかけを表すもの（ね、よ、よね、か、わ、ぞ、さ）

断定を表す「さ」、疑問を表す「か、かい、かな、かしら」

確認・同意を表す「ね、な」、知らせを表す「よ、ぞ、ぜ」、感嘆を表す「なあ、わ」、記憶の確認を表す「っけ」、禁止を表す「な」

「ね」：基本的には、相手も当該の知識を持っていると想定される場合に用いられる。自分の知識と相手の知識が一致していると想定し、これを相手に確認するときは同意要求になり、自分の知識が不確かなときは確認になる。

今日はいい天気ですね。（同意要求）

彼は、確か岡山の出身だったね。（確認）

「よ」：基本的には、相手が知らないことに注意を向けさせる働きをする。したがって、場合によって、単なる、注意、警告等の様々な意味を表す。

財布が落ちましたよ。（知らせ）

もっと勉強しないと、試験に落ちるよ。（注意、警告）

・接続助詞：述語用言の後について、その述語ないしその述語を中心とするコト全体と、次に来る他のコトとの関係を表すもの。

(が、ので、のに、とか、たり、けど、(する)から、(して)から、て)

・助詞相当句

「それに対して、それに反して、なぜかという、とつても、というのは、とはいえ」

※何が格助詞を決めるのか？

(1)ア *こちらへ見てください。

イ こちらを見てください。

(2)ア *盗まれた自転車を見つけました。

イ 盗まれた自転車が見つけました。

(3)ア *来年に、両親がこちらへ来ます。

イ 来年、両親がこちらへ来ます。

→

引用文献

- 庵功雄(2001)『新しい日本語学入門』スリーエーネットワーク
- 庵功雄(2003)『「象は鼻が長い」入門』くろしお出版
- 庵功雄他(2001)『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 亀井孝他編(1996)『言語学大事典第6巻－術語編』三省堂
- 菊地康人(2003)「<周辺><例外>の魅力－そこから見えてくるもの－」『日本語文法学会第4回大会発表論文集』
- 国立国語研究所(1978,1981)『日本語の文法 上・下』
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味I』くろしお出版
- 野田尚史(1985)『セルフ・マスターシリーズ1 はとが』くろしお出版
- 野田尚史(1996)『「は」と「が」』くろしお出版
- 藤田直也(2000)『日本語文法 学習者によくわかる教え方－10の基本－』アルク
- 益岡隆志(1993)『24週日本語文法ツアー』くろしお出版
- 森田良行(1995)『日本語の視点』創拓社